

## 【問題】（演習／共通問題1）

出典：西郷信綱『古典の影』／東北大学 前期日程 00年

## 文章略解

文学作品や、その作者に対する評価はなぜ、どのように変化するのか。これは時代の変化によるものではなく、その作品を読むそれぞれの個人の経験の変化に根ざしている。それぞれの変化が社会的に組織されて、読みや評価の時代的变化が形成されるのである。読みを主観の世界に委ねようとする立場と、逆に完全に対象化しようとする立場との二律背反がいまだに支配的だが、それ以前の地点から作品に近づくのが本来のあり方であろう。

## 解答

問1 (ア)Ⅱ厄介 (イ)Ⅱ成熟 (ウ)Ⅱ平穩 (エ)Ⅱ権威 (オ)Ⅱ享受

問2 経験の量や質の異なるはずの人間に関する問題が、不当に単純化されてしまうから。〔38字・解答例〕

問3 同時にいる他者と同様に、時間を隔てた自分自身のあり方も常に異なったものになっているということ。〔47字・解答例〕

問4 文学作品の読みや評価に共通項が求めにくい問題を、読者の経験の相違によるとして無視すること。〔45字・解答例〕

問5 主体にとっての意味という観点から作品を捉えると独善的な深読みに陥り、逆に対象化して捉えると人間にとって無意味になっ

てしまうという板挟み状態。〔70字・解答例〕

文章略解

能とは時空連続体の劇であり、劇中の登場人物が観客の現実に関わるような同時代性を持っている。これは中世に、宗教と芸術が未分化であったことによる。輪廻という運命を悟って浄福に至るには、自我という妄念を根絶やしにする過程が不可欠であり、能はその陰画としての自我を浮かび上がらせているのである。そんな、妄念の悪夢の向こう側に浄福を見せるといふ中世人の根柢が見えてくるから、私は能に関心を持っているのである。

解答

- 問1 A 〓 歎喜      B 〓 並大抵      C 〓 媒介      D 〓 如実      E 〓 類推

問2 過去のものが現在・未来も生き続けること。〔20字・解答例〕

問3 一切は運命だという解脱に至るには、自我という妄念を根絶させる過程が必要だから。〔39字・解答例〕

問4 妄念を超克した先に得られる悟りの境地。〔19字・解答例〕

解説

問2 傍線部分にある「時空連続体」という語は、問題文冒頭(1行目)にも登場してきている。この部分を手がかりにすれば、何が「連続」なのかということが見えてくる。この第一段落の記述では、「僧の夢のなかに小野小町と深草の少将が現われている」(2行目)ということ、それも単に「過去の人」として現われるのではなくて「夢見る僧の現実のなかに生きる」(6行目)ということ

とが説明されている。このことは、続く段落で「もっと端的にいうなら、小野小町も深草の少将も生き続けているということ、未来へ向っても生き続けて行くことになりました」(12～13行目)と言い換えられている。解答にあたっては、このニュアンスを抽出することが課題になる。要は「時間的な(過去——現在——未来)連続であるということが押さえられていけばいい。」現実のなかに生きる」というニュアンスも織り込みたいところだが、この制限字数では入れられなくてもやむを得まい(この大学の場合、字数制限のかなり厳しい記述問題が多く出されている。織り込むべき内容に優先順位をつけることも求められているわけだ)。

**問3** このように指定語句のある記述問題では、問題文中での指定語句の使われ方を検討することによって解答の方策が見えてくることが多い。まずは三つの指定語句について、傍線部分の表現に関連づける形で検討してみよう。

「運命」と「解脱」についての記述は20行目以下の段落で関連して登場している。「苦しみも救いもこの運命のなかの出来事であった」(24行目)ということが「それが解脱であるという考え方」(25～26行目)につながっている。そのような悟りを開くことが、傍線部で述べられている「浄福へ道を開いている」ということに通じるのである。

「自我」については、同じ段落の後半、26行目以下で説明がなされている。ここでは「ほんらいなければよかったもの」(26～27行目)・「暗い呻き声」(28行目)・「亡霊の母胎」(30行目)などと述べられており、先に検討した「運命」「解脱」と相對するものであると読み取れる。だとすればこちらは傍線部分に言う「妄念の悪夢」に通じるものとして捉えられる。

このように考えてくれば、この設問の要求は、「自我」＝「妄念の悪夢」が、どういうわけで「運命」を悟ること＝「解脱」＝「浄福」への道につながるのか……を明らかにすることを求めているものと読み取れる。この解答にあたっては、30行目以下で、「自我」が「悟りへの否定的バイカイ」であり、「それを根絶やしにすることによって、肯定されるべきものは何か」が見えてくる、という主旨の記述がなされているところを読みとりたい。要するに、「悟り」＝「解脱」に至るためには、その前段階として「自我」＝「妄念」を根絶やしにすることが不可欠である、ということだ。

この点が踏まえられた解答ならば基本的に問題は無い。

**問4** 傍線部分にある「窓」の比喩を解くことがカギになる。この「窓」とは「その(＝悪夢の)根柢を覗くことができる共有の窓」

(40～41行目)とされている。この「悪夢の根拠」については、34行目以下で「悪夢のリアリティの強さ」を知るために探るべきだとされているのである。「悪夢」が「自我」＝「妄念」に相当するものであることは前の問3で検討したとおり。だとすれば、この傍線部分で言う「地平線」とは、そうした「窓」から「悪夢の根拠」を見たさらにその遠くに見える「一本の落ちついた線」であると解釈できる。

したがって、解答にあたっては「悪夢」「自我」「妄念」を乗り越えた先にある「浄福」「悟り」「解脱」である……という旨の記述があればいい。これも問2同様、制限字数が厳しいので、あまり多くの内容は織り込めまい。

